ISSN 0910-710X



研究所報

No. 10

発行所
彌高神社
平田篤胤佐藤信淵研究所
秋田市千秋公園1－16
電話　0188－32－4496

# 平田篤胤儒教批判の辯

齊藤壽胤

幕末から明治に生きた秋田地方の知識人で菅原源八という人物がいる。源八の著述には『日くらし草子』などの随筆が紹介されてきた。近年、源八の著作の全部が翻刻され、その中で『放言雑記』という著述があり、これに篤胤古道学への批判が述べられているのをみいだした。

一体に、近世後期の秋田国学の主流は藩校明徳館和学方の影響もあり、鈴乃屋学派によるものであったが、篤胤が天保十四年没後以降次第に気吹乃屋学派が、時代変革の機運と相まって次第に移行してきたのである。『放言雑記』（『菅原源八著作全集』所収・平成7年・同顕彰会）は随筆ではあるが、単なる随筆とはいえども篤胤批判において看過できないものがある。そこで先ず源八がいうところのものをみてみると、すなわち「○神道より儒仏誹謗のこと／平田大学先生ハ神道の書数十編著述あるといへども只壱弐冊閲したる事あり。大儒なりと人皆称誉し先生も根元は儒道を学び、殺れ夫より改り神道の学に深く入候畢。然るに孔子を謀叛人のやうに誹りりたる処も見へたり。されバ甲を替へたとて先師を悪口するハ不実の不義の人也。釈尊は途中におゐて濘めり死にして誰も構はず腐りて虫が生じ其の臭香をて諸獣集たると涅槃像をみだりに放言せし也。儒仏より神道を悉く悪口せしも誹たる事もあるべかず。しかるを自ら進んで過失もなき儒仏を相手取るハ物好といふべし」というものである。篤胤の著述はほとんど読んでいないと述べながら、篤胤古道学において儒仏批判をしていることに、鋭く嚙み付いているのである。ところで、菅原源八がどのような人物であるのかは、渡辺喜一氏が解題をしているので、それに基づいて述べると、旧大久保村新関（現秋田県昭和町大久保）に寛政六年に生まれ、明治十二年八六歳で没した。二十一歳の時に家督を継いで田畑二〇町歩からやがて五〇町歩まで増やして家運を盛り上げた精勤家でもあった。幼少には菩提寺の住職や村医に学ぶという。さらに長じて進んで華道、茶道、俳諧、算術、紙細工を嗜み、和漢籍に親しんだ。漢学では大館中田錦江、檜山の絵師五十嵐蠹仙らとも親交を深め、竹馬の友に男鹿北浦の瑞光寺玉嶺智英がいた。家督を継いでから五十歳までは新関村の長名、六十三歳までは大久保村の肝煎を勤め、かたわら医事もやったというから、多士済々の中にある政治家、文化人といってもよい。天保の大飢饉にあたっては自ら窮乏の難を救済し、藩財政にも協力したことにより苗字帯刀を許される。幕末から明治維新にかけては、激変する有様をとらえるなど、天保八年から没前年まで二三年間にわたって書き次いだ随筆集が四六冊遺されている。『放言雑記』は文久二年から元治元年の間に綴られた四冊の随筆である。題を己ずから「放言」としているのだから、批判が具体的に述べるものではないことが解る。前掲のように些か揶揄した面があるのだが、それはそれで、このようなことが近世後期の、しかも秋田の中ではっきりと平田篤胤の古道学を別の角度から捉えていたことは見逃すわけには行か

目次

平田篤胤儒教批判の辯　齊藤壽胤　1
平田大人門弟家の由緒消息(五)　滋谷鐵五郎　4
多可本に見られる仙童寅吉　佐々木榮孝　10
研究所記事　16

ない。何故なら、文久年以降の著述ではあるが、この批判が篤胤没後にあった地方の知識人の一捉え方が、時の思潮とは逆に、内在していた批判であったのかもしれないと思えるからである。

ところで、源八が仏教にすこぶる帰依していたことは源八の事歴からみて解る。その反動が篤胤儒仏批判への反撥を招いたとも考えられる。篤胤に対する評価は秋田藩士長山盛晃の「耳の垢」（文政初年起筆～弘化三年）では、「平田篤胤」の項で「かつて幼より東都に至り、三都を経歴し、はじめ儒を学び、後仏学になりて仏書を熟覧し、遂に皇朝神道の最一たるを智りて和学を学び、仏の教への偽なる事を記し、我朝の古代よりの迷いを開き、幾巻の書をあらはし、凡ての人の千古よりの迷いを開きたるこそ実に千古の一人なり」「先生儒学は元より、仏書は尚更、医陰の両道、軍学の書武芸の書其の他万の芸知らざるはなし。さるに依て東都にありし時門人既に三千人あつまれり。皇朝に仏書渡りし以来また斯くの如き人なし。先生をして守屋の賢臣と同時に生まれしめば、皇朝に仏魔の愁絶えんに誠に惜むべし」と、篤胤の没後を惜しみ、幕末の藩士の思想が篤胤に極めて向いていたことを知る。やや時代が遅れて、秋田地方の地誌を編んだ近藤源八は「羽陰温故誌」（全三二冊・明治十六年序～三十六年頃）の第八冊南秋田郡部甲で、篤胤の伝記を生い立ちを詳しく述べ「当時儒仏両家ノ教法盛行シテ天下人心ヲ惑乱シ、独リ漢土天竺有ルヲ知リテ、我日本国アルヲ知ラス。愛国ノ志操殆ント地ヲ掃フニ至ラントス。故ニ其筆ヲ春秋ニ倣イヒ尊内卑外ノ分ヲ明カニシ、我カ帝国ノ尊厳ナルヲ挙テ外国諸洲ノ卑賤ナルヲ記シ、儒仏ノ二家ヲ擯斥シテ日本神道ヲ表明シ、以テ後世人心ヲシテ愛国ノ志操ヲ奮起セシムルモノ」と、みている。また、「平田篤胤翁墳墓」の項では、「嗚呼、翁ノ眼中儒ナク仏ナク又耶蘇ナシ」とするものである。秋田藩士の石井忠行（文政元年－明治二十七年）は、その随筆が地方の文物を広く取り上げている中で『伊豆園茶話』（文久三年起筆～明治二十六年）があり、「平田篤胤江戸より被下」として篤胤の晩年に国許退去にあたることを記している。「行曰／平田が著書漢学を謗り事多ければ幕府の儒官林大学頭が内訴によりて退けられしと聞こゆ」としてみていた。

このように、幕末から明治にかけてはいずれも篤胤の儒教批判が公然と認められていたが、あまりその内容には関して突っ込んだ理解もないようである。その中では先の菅原源八の批判はある意味で異質といわざる得ない。

ところで篤胤の儒仏批判の本質は奈辺にあったのであろう。源八は同じく『放言雑記』で、さらに

○儒仏神鼎足の事

儒仏神の三道は昔の鼎足の如しとあれども、伊勢の本居宣長以来近来平田大学先生より、我が国ハ神国なるに儒仏を信じ神道に入る者なきを深く心中に憤り、儒仏を弊廃せんと色々誹謗の書を著述して神道に引入れんと欲すれども、千年以前より染ミ着たる儒仏の道なれバ容易にハ洗濯なるべからず。是を強て事するハ偏執のやう也。漢唐におゐても韓退之其の外世々の大儒仏堂を追ひ退んとすれども出来ぬと見へたり。

といい、ここでは例えば名湯のあるところに生まれた者が、毎日湯浴みしているにも拘らず病人も多い。これと同じように、「神道は自国の事にして我物也。儒仏は唐や天竺より来朝したるものなれバ、新渡の心にて珍しがりて誰彼も進みて信じ初まりたるのハ終いに広く弘まりたる也」「且ツ仏道より神道を批判したる書物もなし。仏信迎するとて神明を全く麁略する人もあるべからず。天照皇太神宮の御祓受けぬも家もめったにあるべからず。村の鎮守ハ勿論也他村他邦にても利生霊験なる神々を信迎せざる人もなし。神国に生れ神明ハ我物也。いつでもよひと思ふ心ある故也。仏道ハ一間置いて其の隣より来る故、珍ら敷心を以て諸人進ミしもの也。握り飯懐中にあれバ腹の透きぬ類也。この理を察すれバ仏道などを深く咎め誹に及ざる事ならずや」と述べる。源八がこのような意見をいうようになるのは晩年である。そして、篤胤に対してはこれにみえるように大学先生とか平田先生と呼ぶが、宣長には敬称はつけていない。幕末における息吹能屋派の趨勢が影響し、それが源八にあっても敬せざる得ないものとされるが、一方老齢に達して、放言といいながら可成大胆な発言でも遺すことになったものであろう。

篤胤の生まれた大和田家は、崎門学派を受けて学問尊重の家柄であった。したがって「篤胤が十まり一つ二つばかりの頃にや有けむ」「そ

れより七年ばかりが間に、世の並びに漢学を深く努たりしかば、また教へるやう、孔子此ノ国に生まれたらむには、必ス漢国のことを主と学ぶべし、吾は未夕学ばされども此国のことを知まほしけれ」（『古史成分撰録の由緒』）とか、『大扶桑国考』にみえるものでは、大壑の号をば二十二、三の頃に荘子を読んで興味を覚え、その文よりとったという。「予弱かかりし時は、いわゆる性理の学をまなび、それより進みて古学という漢学をなし、また進みて、世に名たかき儒者どもの書を読みわたり、また進み進みて、故翁の教へしまま古の道に入り」（『霊能真柱』）という。いずれも後年の懐旧談に過ぎないが、儒学を学ぶことが武士家柄に生まれた篤胤の基礎学問であったし、また当時の慣わしでもあった。しかし、ついに本居宣長の著述に接して国学に目覚めたというのである。篤胤が享和三年の著述にして『呵妄書』は、儒教に対する批判書として夙に知られる。それは太宰春台が『弁道書』で説える、神の道は堯舜の道であり、天下国家はこの聖人の道をおいては一日も治まらないこと、聖人の道が伝わらぬ以前はわが国には道がなかったことを論じたのに対して、仏教・神道・朱子学を却けて聖徳太子の言といわれている神儒仏鼎立説をば、根拠なしとして否定したのであった。それでも、この『呵妄書』では崎門学派の山崎闇斎、浅見絅斎などの説には皇国魂の言も多いとして、それを賞賛するものがあることから、三木正太郎氏がいうように（『平田篤胤の研究』昭和44年・神道史学会）、宣長が漢流の理学者は歌文の雅情を忘れて道を悟り得ないと非難した論調と、篤胤の儒教批判とは微妙な差異を認めざる得ないものがある。そこでは宣長説の限界を越えている、と指摘し得るものといえよう。

篤胤は、一名を「儒道大意」とする『西籍概論』をものしている。これによれば、漢学・儒教と支那の歴史の大要を示し、日本における儒教と儒者について批判的に書いたものである。勿論、内容は自ら宣長の『馭戎慨言』に影響されているというように、その粗述傾向が強いが、『呵妄書』の主張を受け継いでいた。『鬼神新論』もまた儒学に対して厳しい批判がみられ、後に禍津日神論争まで発展するのであるが、そうした篤胤の儒教批判の裏には、儒者の一般が事実よりも理説や教訓を重んずる傾向に反発し、特に朱子学において素直に神霊の実在を看取できず、陰陽五行や太極無極の理説にとらわれる態度を、暗に駁したものであった。まさに源八が神儒仏の鼎足論を捉えて儒仏の正当性をいうものが、既に論破されているのであって、源八の放言があまりにその論を深くみないで表面上だけを捉えたに過ぎないものであったことが解ろう。そして、篤胤が尊外卑内の卑屈な態度を厳しくいう点では、源八の意見はまさに放言に過ぎないことが明らかである。それでも、篤胤が儒仏に対しての批判は全面否定ではないことは既に知られる。儒教のもつ複雑な内容を分析し、摂るべきは摂り、棄てるべきは棄てるというものであった。これを『入学問答』は

実は漢土、天竺、渤蘭陀の学問をも、凡て御国学びと申し候ても、違はぬ程の事にて、是が御国人にして、外国の事をも学び候者の心得にて候。若しこの意味を心得誤り、世の儒生等が如く、漢土を本とし、御国を末といたし候はば、道の罪人にて、儒道を以て申候ても、春秋の尊外卑内の旨と相反し、いはゆる左道の学者に候なり

という如きによる。中川和明氏が「平田篤胤の古学派批判とその意図」（『神道史研究』第44巻第4号・平成8年10月）に、篤胤が儒教、特に古学派批判の再検討を述べているように、古学派の優れた点をよく理解していたために一層激しくこれらを非難することに徹したこと、古学派やそれに影響された世の儒者を批判することによって国学の勢力拡大を図った、とする指摘は傾聴に価する。篤胤の仏教批判が大乗仏教に向けられた葬式仏教批判であったことは明らかだが、儒教批判が自然と作為にこだわる徂徠批判に重点を置かれたかのようにみられるが、太宰春台批判が儒教に対する最初にみるように、そこにはむしろ国体批判に関心があったと思われるのである。つまり神の神道国学の建設を目指すための、もののあわれ論による宣長の儒教批判とは一線を画する展開であって、宣長と対極をなすといってよい幽冥界思想への萌芽を擁しているものと考えられる。その意味では篤胤の出生地である秋田における一知識人ともいえる菅原源八の篤胤儒教批判の駁言に触発されながら、この篤胤の儒教批判がよって立つところ、本質を再考する必要を強く感じるものである。

# 平田大人門弟家の由緒消息(五)

澁谷鐵五郎

## 石井八郎右衛門真清家の巻

### (1)石井家の概要

山本郡山本町志戸橋の石井家は当主義三氏で、30代という旧家で宝永年代（一七〇四―一七一〇）以前と過去帳にあるが、記録に見られる先祖の最初は安永五年（一七七六）没の人で俗名不詳、法名「常山道住居士」とあり、約二百年前の人。秋田藩主八代、佐竹義敦当時の人である。

天明五年（一七八五）佐竹義敦は、38歳で没した。本稿のヒーロー石井家27代八郎右衛門真清は、佐竹義敦没して四十年後の文政八年（一八二五）に生れた。石井家は、代々八郎(良)右衛門を襲名している。

山本町史第四編（資料集）に「志戸橋村、八郎右衛門」の名が次のようにしばしば見られる。（※）は石井家記録。

表1

| 年号 | 西暦 | 月/日 | 記載事項 |
|---|---|---|---|
| 寛保3 | 一七四三 | | 志戸橋八郎右衛門外数名　新田開発 |
| 寛延4 | 一七五一 | 7/10 | 志戸橋村　老百姓　八郎右衛門 |
| (10/27改宝暦) | | | |
| 宝暦3 | 一七五三 | 8/3 | 〃 |
| 明和元 | 一七六四 | 閏12/24 | 〃 |
| 〃4 | 一七六七 | 10/10 | 〃 |
| 〃9 | 一七七二 | 正/17 | 〃 |
| (11/16改安永) | | | |
| 安永4 | 一七七五 | 10/ | 〃 |
| ※〃5 | 一七七六 | 1/2 | 〃 |
| 寛政元 | 一七八九 | 1/1 | 過去帳（俗・法名不明） |
| 〃6 | 一七九四 | 9/5 | 志戸橋村　老百姓　八郎右衛門 |
| 享和6 | 一八〇一 | | 〃　肝　煎 |
| ※文政8 | 一八二五 | | 〃　〃 |
| 〃9 | 一八二六 | | 石井八郎右衛門真清生る |
| 天保3 | 一八三二 | | 志戸橋村　肝　煎　八郎右衛門　（真清2歳） |
| 〃8 | 一八三七 | | 〃　〃　〃　（〃8歳） |
| 〃12 | 一八四一 | | 〃　〃　〃　（〃13歳） |
| 弘化2 | 一八四五 | 8/24 | 〃　〃　〃　（〃17歳） |
| 嘉永5 | 一八五二 | 2/12 | 真清　親郷肝煎　（〃21歳） |
| | | | 〃　仁井田村肝煎　（〃28歳） |
| | | | 桧山町肝煎加談役 |

寛保三年（一七四三）から安永五年（一七七六）まで33年、寛保三年に新田開発した八郎右衛門は中年に達していたろう。さすれば、この間二代とみられる。安永五年から文政八年（一八二五）に真清の生れるまでの約50年間、この間約二代(先代八良右衛門)。賞賛状（石川理紀之助）には『天保三年辰六月、弐拾弐歳にして肝煎役……』とあるが、数え年8歳では有能な後見人をもってしても至難であろう。これは、父かと考えられる。以上を図示するなら、次のようになろう。

寛保三年 ― 安永五年 ― 享和三年戒覚回光居士 ― 文政八年

真清

### (2)平田門人石井八郎右衛門真清

石井家は寛保三年（一七四三）八郎右衛門外数名をもって、注進（ちゅうしん）による新田開発に着手している。開発には、差(さし)(指)紙(がみ)と注進がある。前者は主に給人（藩士）が領主に開田願いを出し、その認可をもって開田に着手。後者は農民が地頭に申し出て、藩の許可のもとに開田した。つまり武士と農民による開田があった。

開田は大資本なくして不可能である。その資本は、自己資産である。この時点における八郎右衛門は、小作農民とは異なる地主階層のような資本家であったろう。代々「老百姓（おとなびゃくしょう）＝肝煎の補佐役」役を継承して

いる点からして、資産家にちがいない。

八郎右衛門真清は肝煎に就任しているが、石井家の肝煎（現今の村長に相当）は真清の父以来からのようだ。真清は、次のような略歴のもと明治に至った（表2）。

嘉永五年における真清の年齢は26・28・29と異なるが、これについての考究は日時的余裕がないので、今後の探究に挨つことにする。

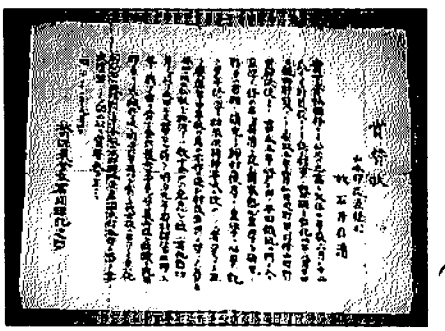
真清の平田門人云々について「賞賛状」は、次のように評している。

嘉永五年江戸に出て平田鉄胤の門に入り皇学を修め、名を真清と定む。爾来熱心皇学を研究し、夥多（クワタ）の書類を講究して帰村の後、専ら皇学の必要を説き多年誘導の結果、近隣神葬式に改めたる者多きに至る。（句読点、筆者）

※平田鉄胤に入門した門人は「篤胤没後の門人」という。鉄胤は入門者を拒むことなく許可したが、すべてを「篤胤没後の門人」とした。

表2

| 年号 | 西暦 | 月/日 | 年齢 | 事項 |
|---|---|---|---|---|
| 文政8 | 一八二五 | | 1 | 誕生 |
| 弘化2 | 一八四五 | 8/24 | 21 | 親郷肝煎 |
| 嘉永5 | 一八五二 | 3/23 | 28 | 仁井田村肝煎并桧山町肝煎加談 |
| | | 7/15 | | 菩提寺「松庵寺」の寺請証文を所持し諸国神社仏閣の旅に出立 |
| | | | | 自分の屋敷内鎮守に、稲荷大明神と金毘羅大権現の神霊を勧請 |
| | | 11/ | 29 | 平田篤胤国学に入門 |
| | | | | （没後の門人＝門人名簿に29歳とある） |
| 慶応年中 | 一八六五 | | 41 | 凶作に苦しむ村民へ自分持林四ヶ所の松杉を施与し、数十余戸の危急を救う |
| | 一八六八 | | 44 | この功労に依り永苗字帯刀を免許さる |
| 慶応4 | 一八六八 | | 44 | 戊辰の役に農兵180余名を以て義兵隊（諸兵隊）を組織し鹿角に戦う |
| 9/8改明治 | | | | この勲功により一代士族に召立らる |
| 明治10 | | 2/27 | 49 | 明治の世となり訓導に就任 |
| 〃22 | | 1/17 | 65 | 妻ワサ没　神子霊位 |
| | | | | 死去　訓導石井真清霊位 |



石川理紀之助の賞賛状

真清は江戸に出るとき、菩提寺（松庵寺）発行の「寺請証文」（寺請状）を所持して出発した。寺請状は寺院が自寺の壇家であることを証明した書。つまり一種の身分証明書である。寺請状の冒頭には、次のようにある。

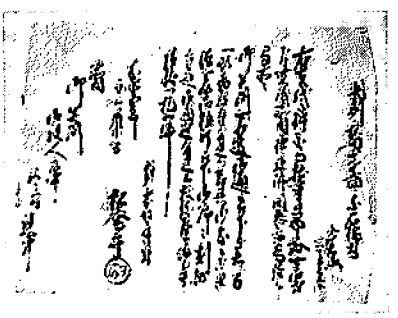
羽州秋田山本郡志戸橋村
八郎右衛門
行年廿六歳

右者代々禅宗にて拙寺旦那紛無御座候此度諸国神社仏閣参詣為致候間…（以下略）

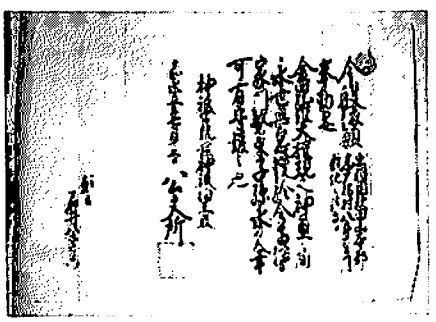
嘉永五年三月廿三日　松庵寺㊞

七月十五日、真清は「神祇官統領神祇伯王殿公文書」から、自分の屋敷内に鎮守とする「正一位稲荷大明神」と「金毘羅大権現」の神霊勧請が受理され、その勧選状を受領した。このあとの十一月、真清は平田国学に入門した。これ以降の真清については、略歴に誌した。

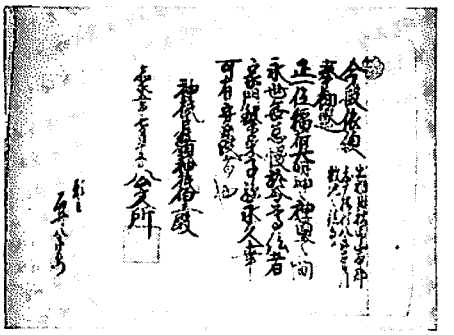
真清夫妻の葬儀は、神葬式をもって執行されたようだ。霊位から察するに、真清は明治の世に訓導



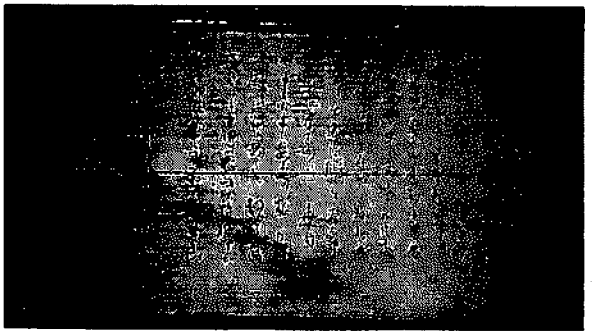
石井真清の所持した松庵寺証文の寺請証文



石井真清の神霊勧請によって嘉永5年7月15日授与された金毘羅大権現の勧選状



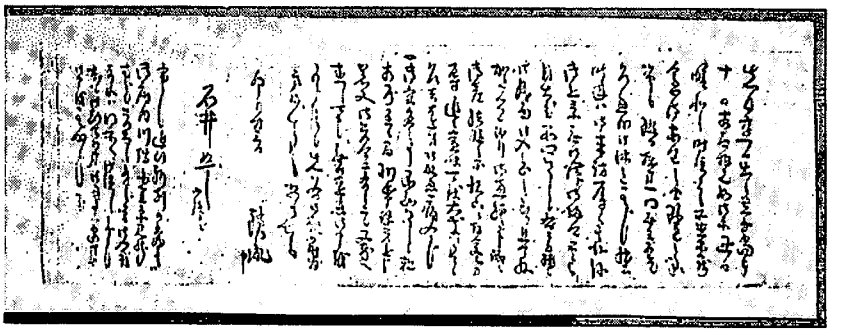
石井真清の神霊勧請によって嘉永5年7月15日授与された正一位稲荷大明神の勧選状



嘉永7年3月17日　石井真清
屋敷内鎮守社に献詠した俳句

（学校教員）であり、また妻ワサは神道の神子（みこ）とみられる。真清の嗣子真利は、明治3年生。

真利は農を業とし23歳（明治25年）で金岡村（明治22年、志戸橋・外岡・金光寺・豊岡の四村合併し金岡村発足）村会議員、次いで山本郡会議員に進んだ。昭和5年6月9日、61歳で没した。正法院天眞利中居士。神葬式は、真清一代であったようだ。真利の嗣子は三郎、明治33年生。



石井真清宛の平田鉄胤書簡

三郎は金岡村村会議員に就任し、村政に尽力した。昭和51年3月15日没、77歳。三郎の長男は現当主義三氏、昭和2年生、石井家30代。

義三氏は獣医学博士（麻布獣医科大学）、獣医師免許を持つ獣医学の権威者で、自宅に家畜診療所を開設し、次のように多くの公職を歴任した。

能代農業高校教員、県農業共済連、県北家畜保健衛生所技師、同防疫課長、県中央家畜保健衛生所衛生指導議長、秋田県立農業短期大学教授等々。

麻布大学院研究員、同獣医大学耐性菌研究員、同大学衛生学研究員、同大繁殖学研究員等に所属しておられ「常に学問の探究にある」を信条とする幅広く学問の探究に尽きない意欲旺盛な学者である。

氏の妹鉦子さん（秋田大学教育学部卒）は、秋田市土崎港の松田金十郎氏夫人。松田家は味噌・醤酒の醸造を営んだ旧家であったが、昭和戦争の企業統合による現在は、酒類販売の商家。松田氏は秋田市議会議員をはじめ多くの公職を歴任し、現在も地域の向上発展に数多くの肩書を持ち活動を続けておられる。金十郎氏六代前の道政の弟羽石文之助通根は、天保12年（一八一四）12月18日、36歳で平回篤胤に入門した直門である。

※引用資料　石井家資料・山本町史・松田家資料

## 能代鎮守日吉神社宮司
## 坂本家の巻

### (1) 神社の草創と別当

能代の鎮守「日吉神社」の創始は、中世末期の天文二（一五三三）年と伝えられる。当時の能代・桧山地方の領主は、桧山安東氏。領主安東尋季の臣清水次郎兵衛政吉、霊夢により海浜より神体を得、祠（ほこら）を建てたのが神社の草創という。

神社の祭祀は神職、その長が神主（宮司）。中世―近世の、いわゆる神主の多くは「修験（しゅげん）＝異称―法印）」によって行なわれた。修験は「修験道（宗）」をきわめた修験者、また山伏とも呼ばれた。

修験道は、日本の山岳信仰の一形態であり、山岳信仰は原始的信仰で、それに仏教の密教（特に天台・真言の密教）的要素が習合し

て成立した。神仏混淆―本地垂迹思想により神仏は習合したが「仏を本地、神を垂迹」とした。つまり仏が主で、神を従とした考え。

修験者（山伏）は密教寺院を本拠とし、神仏習合性を示し大峰山を修験道の中枢地とし大峰入りの回数を積むことが功とされた。近世の山伏は村々に定着し、神社の神職化する修験者が多く神社の祭祀にあたり別当と呼ばれ、子孫にこれを継承した。

日吉神社初代の祭祀者（別当）は栄長（天台宗密教本山派修験）、現日吉神社宮司坂本家のご先祖である。栄長は清和源氏平賀系の末裔で、坂本氏の称号は先祖の由緒ある江州（滋賀県）坂本（大津市の一部）の地名を採ったものという。

**(2) 日吉神社別当代々**

栄長を初代に二代尊栄、尊栄は「利生院」と号した。修験は神仏習合なる故に、名字（苗字）を用いず寺院号を冠したものであろう。三代尊信、四代尊雪は共に国学に通じた。五代尊通、六代尊秀、七代尊全を経て、八代尊芳の代、天明七（一七八七）年称号を利生院能代寺と改めた。尊芳は文化六年（一八〇九）醍醐院（醍醐寺三宝院＝真言密教当山派）に修行中、参殿（皇居に参内）の栄に浴した。

初代栄長は天台本山派なることは前に述べてあるが、尊秀の代には真言当山派に轉向している。これには、次のような事情がある。中世の安東氏と交代し秋田の領主となった佐竹義宣は、領内の修験を「醍醐三宝院当山派」に改めた。常陸時代の佐竹氏は、一門の今宮家が「聖護院派（天台密教本山派）関東地区全修験山伏の頭領」であった。ところが慶長七年（一六〇二）佐竹氏が秋田へ国替となすや聖護院は「出羽は遠国なので関東の支配はできない」と、今宮氏の修験支配権を剝奪した。佐竹義宣この処置を大いに怒り聖護院本山派（天台）と断絶し、佐竹領内の修験を醍醐三宝院当山派（真言）に改めた。こうした事情により尊秀の代には、すべに当山派に改派していた。九代良鎮（慎）の嗣、十代勇翁。勇翁の代に明治維新による新政権が形成し、一八六八年（慶応四～明治元）明治政府の宗教改策にもとづいて神仏判然令（神仏分離）から発せられ、修験道は廃止（明治五年）され修験者の多くは復飾し神職に転じた。勇翁その例外になることなく復飾し、日吉神社の神職（神主）となり神事を続けた。

**(3) 平田神道の門人**

勇翁、その長子定寿、定寿の長子武雄は本稿のヒーロー、つまり平田神道の門弟である。慶応四年（一八六八）右の三者は、揃って篤胤没後の門人に名をつらねた。この時点は修験名で、復飾後は次のように坂本の氏号を冠した（表3）。

勇翁は文化五年（一八〇八）生れ、若いころから憂国の志が熱烈であった。弘化四年（一八四七）九月、志士頼三樹三郎（頼山陽の三男）が北海道を探検し、その帰途佐竹領に入り、数日能代に滞在した。勇翁は詩を能くしたので、互いに詩賦を交換するとともに厚い友情を結んだ。三樹三郎が安政の大獄で刑死すると勇翁は、身辺に累がおよぶのを避けて家を十九歳の長男佐源太に譲り江戸にのぼった。江戸では平田塾や市井に身を潜め、後年帰郷したが閉居し余生を送った。妻は、能代の漢学者にして俳人（俳号芦州）三輪良弼の姉女。

三輪良弼の妻女久（ひさ）は、久保田の豪商二代目那波三郎右衛門祐忠の弟（初代祐祥の四男）升屋家初代祐従の三女、有名なる俳人吉川五明（久の父祐従の弟）の姪。国文・和歌・俳諧・筆道・裁縫を学び婦徳を備え、翠羽と号した閨秀文学家。夫と共に子弟・子女を教育した。才学は清少納言に及ぶというので「権少納言」といわれた才女。翠羽の叔父吉川五明は那波祐祥の五男で、名を兄之（しげゆき）と称した。久保田の富商吉川惣右衛門吉品の養子に入り、妻は吉品の女律（リツ）。俳聖吉川五明については、あえて述べるまでもあるまい。

左源太は天保八年（一八三七）生まれ、名は定寿。妻伊麻（いま）は、桧山多賀谷家の家老石川官太夫の長女。官太夫は多賀谷家四代の主君に仕えること34年、うち23年間は家老職、重く用いられた人。

表3

| 入門年月 | 入門者修験名（名乗） | 年齢 | 復飾後の氏名（名乗） | 死去年月日 | 年齢 |
|---|---|---|---|---|---|
| 慶応四年十一月 | 能代寺勇翁（大安） | 61 | 坂本勇翁 | 明治13・12・19 | 73 |
| 〃 | 能代寺左近（心定） | 32 | 坂本左源太（定寿） | 〃 31・2・17 | 62 |
| 〃 | 能代寺武雄（孝全） | 16 | 坂本武雄 | 〃 17・8・26 | 32 |

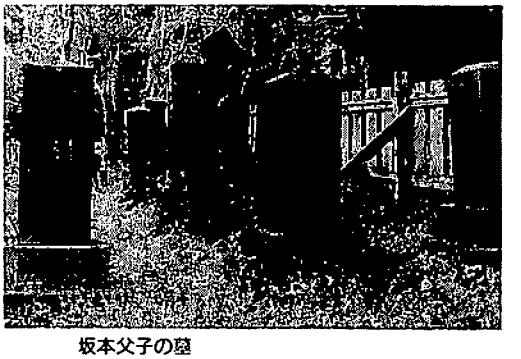
坂本左源太定寿肖像

数多くの功績を残したが、財政改革の一として桧山茶の改良普及に着手した殖産功労は不朽である。

父勇翁の影響を受けて育った左源太は江戸の平田塾に学び、京都にも遊学した。戊辰戦を前に奥羽鎮撫副総督の沢為量一行を能代に迎え、その後有志を率い能代浜の警備に当った。戊辰戦争では近辺の神職、町内の若衆、阿仁の根っ子マタギなどを集めて奇兵隊を組織し、藩の北方部隊長須田政三郎の配下となり奪戦した。

奇兵隊は十二所方面まで進撃し、偵察、狙撃など、マタギの特性を生かした神出鬼没のゲリラ戦法で活躍、戦後その功を賞し藩は永代近進並みに取り立てた。配下にあった阿仁マタギたちは後年、クマの皮などの土産を持ち「隊長、隊長」と親しんでたずねてきたという。

左源太定寿の長男武雄は近衛陸軍伍長だったが、明治十一年の竹橋騒動に連座し脱営した。しかし、青森で捕まり弘前に収監され、同所で死去した。竹橋騒動とは、明治十年の「西南の役」での輪功行賞に不満を抱いた近衛兵約二百人が十一年八月二十一日に起した事件で、射撃と放火、週番士官を殺害し兵営を脱走した。十月、主謀者52人は越中島（東京）で銃殺された。


坂本父子の墓
向って左　坂本勇翁　右　坂本左源太定寿

長男を失った定寿は、長女に能代の柳谷家から定静を婿養子に迎え、日吉神社十二代目の社司を継がせた。定静は神社に40余年奉仕し、大正十四年「奉任官」（高等官）に任ぜられた。山本郡神職会長、秋田県神職会理事、全国社司社掌会評議員、神宮奉斉会主礼、皇典講究所評議員等を謹厳に兼務し、その功績は高く評価され、数多くの表彰を受けた。昭和19・6・18死去した。

### (4)　済々たる人脈

定静の長女イサ（明治十六年生）は15歳のとき、23歳の島田豊三郎（俳人五空）に嫁入りした。イサは才徳すぐれ俳号「功女」と号した閨秀俳人。明治37年6月、二歳になる男児と多くの秀逸な句作をのこして22歳の若さで病逝した。短い歳月の間に秀れた才藻を発揮し得たのは、文学的家系の遺伝と天性にあるといわれる。

功女の夫豊三郎は北日本俳壇の巨星と評され、また和歌・漢詩に通じ、能代図書館長・北羽新報社長・県会議員、石井露月と「俳星」を創刊するなど多彩な文学者であった。昭和3年12月没、54歳。

俳人島田五空の本家は、能代畠町で屋号「越中屋」と称した富豪商家島田治右衛門家。島田家10代治右衛門は、醤酒醸造・能代銀行開業、大地主。12代治右衛門の妻は、一日市村（南秋田郡八郎潟町）の豪農畠山源之丞の女タケ。タケの弟晋（すすむ＝源之丞七男）は土崎（秋田市）の豪商近江谷栄治の養子となり、栄治の長女サノと結婚した晋は家督相続し名を栄次と改めた。

栄次は土崎築港・秋田市電灯の先覚、県会議員・代議士・秋田銀行創立委員など幅広く活躍した実業界の先駆者・政治家、また書を能くし俳人としても一家をなした。昭和17年6月没、69歳。

栄治の嗣子駒（こまき＝駒）は、小牧近江と号した。プロレタリアの雑誌、「種蒔く人」創刊の旗頭。昭和53年10月没、84歳。

雑誌「種蒔く人」は無産労農階層の解放を旗印とし、政治・思想・文芸などの分野に実践的活動を世界的視野をもって展開した組織的なプロレタリア運動とするなら、雑誌「種蒔く人」は、文筆的文芸活動の展開であり、身をもって実践活動を躬行したのは「秋田労農社」の旗上げをした近江谷友治・畠山松治郎であろう。

友治は近江谷栄次の養父栄治の末子で、明治28年2月生。松治郎は栄次の実兄畠山家10代鶴松の四男で、明治27年12月生。

両者は社会主義思想をスローガンに、労農民衆の救済に身を挺し果敢な実践活動を展開したが、世

は昭和戦争のさなか、社会主義の実践は国家権力による弾圧に破砕された。獄舎に投ぜられた友治は血を吐く万恨の言葉「敗けた」を残し、昭和14年8月病没、44歳。病いに倒れた松治郎は、同20年12月病逝、52歳であった。

種蒔く人の旗頭、小牧近江の弟晋作は、能代の島田治右衛門家14代を継承した。同家12代治右衛門の妻タケは、晋作の父栄次の姉で、つまり晋作は縁戚のある家の嗣子となった。島田タケ（12代治右衛門の妻）の長男（13代治正）に男子なく、長女の妙子に晋作は入聟した。晋作は兄小牧の主宰する「種蒔く人」の青年部に身を置き、プロレタリア評論家として活躍した。昭和戦争後、社会党から立候補し代議士当選二回を果した。昭和25年6月没、40歳。

**(5)　坂本定静の子孫**

定静の長男定徳（イサの弟）は神宮皇学館を卒業し教育界に入り、能代高等女学校の校長、県下（県の行政下にある地域）女子中等教育界の重鎮に列し、社会教育・育英会・体育教会等々の公共事業に関与した。国は高等官三等正六位に叙し、その功績を称えた。昭和48・9・15、89年の天寿を全うした。

定徳の長男は、定夫氏（大正5年生）。次男の武彦（大正9年生）は昭和16年12月神宮皇学館本科国漢科を繰上げ卒業し、翌17年2月秋田兵営（北部第17部隊）に入隊した。同18年1月、歩兵第117連隊（秋田郷土部隊・満洲国黒河省山神府駐屯）に転属し、12月「陸軍少尉」に任官した。以後の坂本少尉は昭和19年5月、三方原第126飛行場大隊に転属し、10月同大隊は比島に転属となり11月マニラに到着した。坂本少尉はマニラで疾病により陸軍病院に入院し内地還送となり、昭和20年1月広島陸軍病院、次で各務原（かがみはら）陸軍病院に移り、五月除隊し帰郷「人工気胸治療」を続け、21年9月健康やや回復し、県立能代中学校の教諭に就任したが、翌年再発し11月、27歳をもって病逝した。昭和43・4・6、戦地発病、内地死亡（戦病死）をもって靖国神社に合祀された。

十四代定夫氏は昭和12年神宮皇学館本科を卒業し官幣大社札幌神社主典、同16年5月北海道皇典講究分所理事、同学階検定常任委員、同6月別格官幣社靖国神社主典、同17年5月歩兵第117連隊補充隊（秋田兵営駐屯）に召集となり、次で歩兵第117連隊（秋田郷土部隊・満洲国黒河省山神府駐屯）に転属となり、満洲最北端国境第一線の警備についた。同20年4月、本土防衛の任を帯び、九州博多に部隊移動し終戦に至った。

昭和22年1月定夫氏は靖国神社祢宜に就任したが、5月連合国軍総司令部（GHQ）民間情報教育局宗教文化資源課顧問に招かれ、8月秘書課長、23年5月祭務部長、26年10月総務部長、権宮司代理等々の要職を歴任した。

昭和48年3月、氏は22年以来の役職を一切辞職し、10月亡き父（九月死去）の役儀日吉神社の宮司を継承した。功により62年3月「浄階一級」を授与された。氏は靖国神社神職とGHQ兼務について、次のように回顧されている。

坂本定夫氏

敗戦に依る占領下、第一の問題に靖国神社がありました。偶々小生望まれてGHQに籍を置く機会に恵まれ、本問題に関し、いささか尽力し併せて神社一般の問題に関しても、お手助け（護国神社問題、国有境内地処分の問題等々）を致しました。

氏の回顧は字数にして数行にすぎないが、その内容は優に一巻の大冊となろう。特に「第一の問題である靖国神社云々」は、GHQの大きな問題であったろう。

昭和二十年八月、日本に進駐したGHQは初期占領管理政策を政治・経済の二部に分け、政治の中に「軍国主義の抹殺」があった。GHQは、日本軍国主義の思想的背景に「国家と神道との結合がある」として「神道指令」を発し、国家と神社神道とを分離し、軍国主義の根絶をはかった。

かくして靖国神社は従来の性格を一変し、東京都知事認証の「単立宗教法人」として再出発した。氏は「軍事神社」としてGHQの監視下にあった靖国神社の存続について多くを語らないが、寝食を忘れGHQ・日本の各界を奔走し神社の安泰に寄与された。

日吉神社宮司の外、氏は次のような役職を兼務している。

向能代稲荷神社宮司、神社本庁

参興、秋田県神社庁顧問、能代市文化財保護審議委員、裏千家淡交会秋田北支部副支部長、神道国際友好会員、其他数々。

氏は屢々、外国に向われる。主として「神道国際友好会」に関わるのが多いようだ。昭和50年には、時のローマ法王に謁見、その他イスラエル、ギリシャ、北欧、英仏、インド等に出向し宗教関係者を訪ね会談し、国際親善の一端にと精力的な活躍を広く展開しておられる。

### (6) 日吉神社風聞抄

陰暦「二の申」の祭事には、婦女盛粧して神社に参詣した。男子を有する父母は、嫁さがしをしたという。

神社には平田大人に関わる秘宝はもとより、二代尊栄の笈、鈴鐸、大閤秀吉名護屋御陣の茶器、小堀遠州愛用の茶杓、古渡南京の陶器類、狙雪の猿の書幅、数多くの古仏画、雲慶作の獅子頭、徳川将軍家光の景清懸額、坊城・鷹司両公の懸額、第々枚挙にいとまないほどの重宝を珍蔵していたが、昭和25・2・20の能代大火に神社（本殿・拝殿・御興庫・社務所）、末社、宮司室等一切炎上し、前記宝物の一部を残し、そのほとんどを烏有に帰した。

現存する主なる宝物は①坊城亜相筆日吉社、②縁起祭礼図（坂本慶済描）、③狙雪の猿絵、④山王曼陀羅図。

右は何れも軸装、①・②は能代市指定文化財。①の「防城亜相」とは、防城＝旧公卿（伯爵）坊城家、亜相＝大納言の唐名。坊城家は代々、権大納言家であった。

この外に坊城大宮司、鷹司明治神宮宮司、長谷熱田神宮宮司の書など、新に揮毫を請うた筆跡を社蔵している。

※引用資料　坂本家資料・山本郡胄胤録

■

# 多可本に見られる仙童寅吉

## ＝仙境異聞との対比＝

佐々木　榮　孝

### 前書き

先般、大館市立中央図書館に依頼して「栗盛教育団旧蔵・真崎文庫」の中の「覚書・多可茂助筆」なるコピーを掌中することができた。

これは、かなりの有識を持った知りあいからの依頼によって、多可氏が晩年（明治初年）に書いたものである。

その内容は多岐にわたるが、平田先生のところでは、江戸追放の事に始まり、先生が大和田氏に話された、奇談とも言うべき仙童寅吉に関しては、古代中国の故事「壺中謫天」と同様の話が記されている。

この話の最初に、「大和田君と申す人は、亡父（那波祐生）とは至って懇意にて」と記されていることから、多可氏は父から又聞きしたものと推察されるが、よほど興味を持たれたのであろう、詳しく記録している。

更に、当時の一部の門人達にも触れられているが、晩年の平田先生を偲ぶ一助になればとの考えから、それ等の部分をも含めて次に掲載することとする。

なお、覚書の読み下しについては、愚老に成し得ず、先達の師と仰ぐ、鷲尾厚先生のご好意によって成されたものであることをお断わりしておきたい。

### 覚書・多可茂助筆（抜粋）

#### 平田先生に関する後半部分

平田大学（角）君（篤胤）、江戸御追放、秋田へ下らされ候儀は疑と定り候事にも之れ無く候得ども、神学者の事故、兎角佛法を忌きらひ（中略）平田のよふ教ふる所のもの申し述べ候得ば終御政事にも抱り、江戸御追放にも至り候らわんとの下々推慮もこれ有るよし。

扨又、平田君、大和田君へ嚙被候中、奇談と存ぜられ候は、

「平田にて小間遣ひの若者（寅吉）、廿才位にて（実は十五歳）極正直ものにて、気才も無し。

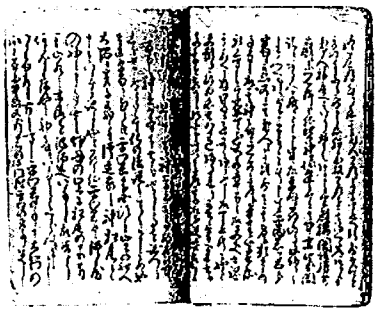
ある時、日替りに使いにいだし候所、帰り申さず候。四五日までども参らず、夜中帰り来り。今迄いづ方に居候やと尋候所、天上に居候と申す。

甚だ不審故、能々聞き糺し候所、両国橋詰に薄縁へ種もの取り揃え売り候老人これ有り、篤と見候中、夕ぐれに至り、老人福べの大いなるに種もの納め、夫へ自分両足を入れ、直々その福べ、天上へ登り、行え見え不るよふに成り、余り面白く翌日また両国橋詰参り見候所、きのふの通り種もの店開き居り候。

終夕ぐれに至り候所、其老人われとともに天上へ行き度ないかと尋ねられに付き、参り度申し候所、種もの収め、われを其の福べへ入れ、あとより老人福べへ入り、暫しあると、金殿楼閣結構なる御殿へ参り、見渡し候所、皆神様達にて、其の中末座に太閤記にある人々居候よし、申し聞け候故、委細尋ね候得ども、必ず帰り候とも、人へ語りなど申し付けられ候と斗り、申し聞け、平田君も甚だ不審に思われ、又々其老人とともに行度ば、其身へ頼みたき事これある故、其神さまと見受候御方へ、朱書を以て御書添え願上申すべしとて、兼て訳らざる文章これ有る故、それ丈書き認め、其ものへ□□、

四五日過ぎ、又々帰り申さざる故、天上行き候やと夫形りに致し置き候所、七八日過ぎ帰り来り、取り遣し候書付へ、朱書に面文字を書き出し持参、申し聞けには落字故わからざる筈、書き出し遣わす可しとの仰せ被れに候よし。旁不審の至りに候と、平田君しか申すのよし。

是等は神学者の事故、世の中に八百万之神立、日本を守らせらるゝ事を、諸人にしらせ申したきよりして、仏の法説のごとく申され候ものにや。是れ不審の至りに候」



「覚書・多可茂助筆」の部分（終夕ぐれに至り候所、其老人われとともに）

平田君御下国頃の山王の社人大隅（宮司土崎氏）も、弟子相成候に付、酒造家之神、松尾と申すはいかなる訳に候やと尋ね候所、平田君は酒屋の神と申す事無し、伊丹（兵庫県）の山上に、松尾の宮有り、其山水の末流を汲み、酒造りいたし候故、昔より何となく酒やの神さまといたしはべらんと御申候よし。いかさま左もこれ有る事。

平田君の事は、大和田のあと井に小野崎又右衛門君の御同性平田の弟子と覚え候。此両家より御聞き取り成され候はば、委細相分り申す可し。町人にては肴町元桐油やにて、小谷部（甚左衛門春宣か）とて茶の湯など好み、風流めかし候人にて、御一新に至り神祭に抱り候事などこれ有り、是も平田君の弟子にこれ有り候。

注・（　）内と――線は筆者記

## 神仙伝と蒙求の中の壺公謫天

仙童寅吉と謎の薬売りの老人との話については、前述の如く、古代中国の著書「神仙伝」の「壺中天」や、「蒙求」の中の「壺公謫天」等に見られる。

「神仙伝」と「蒙求」については後述するが、それ等の関係部分の話を概括すると次の通りである。

費長房と壺中仙（謎の薬売り老人）「仙人の研究」から

「中国後漢の時代、汝南（漢・郡を置く、河南省汝南県の東南に位置す。旧汝寧）の費長房と言う人が、市掾（市の役人）であった時、売薬する一老翁あり。

市が終わると、店頭の壺中に身を隠すを常とした、故に壺公とも称されている。

長房、独りこれを知り、厚く好誼を通じ、老人に導かれて壺中に入り、壺中の玉堂で酒肴の饗宴を受け、老翁自らの神仙界のものであるが、罪を得て、暫く此の世に在ったのだと語り、別れに酒を贈られた。器は小さかったが、長房と終日飲むも尽きることなし。

長房、逗留中に仙道における咒符、召軍符・召鬼符・治病玉府等の壺公符等を会得したという。

また、長房が帰宅する時は、壺公竹杖を与えたので、長房はこの

杖に乗ると、忽ち夢心地となって家に帰れたが、実はその竹杖は壺公に仕える青竜であったという。

以上が、壺中天や壺公謫天の概略である。

**神仙伝**

東晋の人、葛洪（抱朴子）の著書。道家の学者、儒学を以て知られる。本書は老子を始め、九十二人の伝記を集めたもの。

**蒙求**

唐の人、李瀚の著書。中国の古代から南北朝時代に至る有名な人の伝記・説話を、一事項を四字で著し、五九六事項を収める。類似したものを二句一対とし、八句毎に韻を変えて、歌い安く、覚え安く編纂されたもので、初等教科書として後世まで用いられた。

## 日本への伝来と翻刻・補註本の状況

日本には、平安時代に伝来し、後に補注本も伝わり「勧学院の雀は蒙求を囀る」との諺も出たほど盛んに用いられたと伝える。

江戸時代、我が国に於いても、盛んに翻刻・補注本の版本が出されているが、それ等を成した代表的な人々は次の通りである。

**小瀬甫庵**（一五六四～一六四〇）

儒医。軍学・易学。名は道喜。関白豊臣秀次に仕え、晩年加賀前田侯に仕えて禄二五〇石。寛永十七年没。享年七七。著書多し。

文禄五年（一五九六）我が国で始めて『補註蒙求（宗の徐子光注）』を翻刻す。『太閤記』三巻」『太閤軍記』『信長記』『天正軍記』『童蒙先習』等々。

**松永昌三**（一五九二～一六五七）

儒学。名は遐年、号は尺五博覧強識で十八歳で豊臣秀頼に大学を講ず、加賀侯の礼遇を受けたが晩年京に帰る。京都所司代板倉侯が、尺五の学を重んじ堀川に講習堂を創めさせる。従学の士多く木下順庵・宇都宮遯庵等は皆この門下。明暦三年没。享年六六。

著書多し『蒙集抄』『五経集註首書』『四書事文実録』『古文後集首書』等。

**宇都宮遯庵**（一六三三～一七〇九）

儒学。松永昌三の門下。宝永六年没。享年七七。著書に『蒙求詳説』『日本人物史』等。

その他にも、著名本であったが故に、林道春、岡白駒、下河辺拾水、伊東背鄰等、その他多くの人達が携わっていることが知れる。

## 仙境異聞と多可本との比較

多可茂助の覚書（以下多可本という）の平田先生に関した部分は最初の段階で示したが、「仙境異聞」の中のこれに聞した部分については、紙数の関係から割愛したことを、ご寛容願いたい。

ここで、仙境異聞と多可本とを比較してみるとき、所々に違いがあることに気づく。そうしたことは多可本においては又聞きであり、また、双方にはかなりの年数も経ていることも事実であるが、数多く出ている翻刻・補註本等によって生じているのかも知れない。

ここに、大きな違いの部分を、二つ程次に紹介しておきたい。

まず、寅吉と謎の薬売りの老人との出会い場所であるが、仙境異聞では「東叡山（現・上野公園）山下の黒門前なる五条天神あたり云々」とある。然し多可本では、当時江戸市中で、もっとも賑わっていたと考えられる「両国橋のたもと」となっている。

また、多可本の中程には、「金殿楼閣結構なる御殿へ参り、見渡し候所、皆神様にて其なか末座に太閤記にある人々居候よし」とあるが、仙境異聞には全く記されていない部分である。

こうした部分的にしろ、蒙求における日本的注解考証に依る違いの要因は、平田先生の考証に依るものではないことは確かである。

中国に於いても、早くから蒙求の補註本や□□蒙求抄といったものが種々出ていて、それ等が次々と伝来していた模様である。

日本でも、小瀬甫庵の補註蒙求が出て以来、蒙求はかなり評判もよく、次第に講究隆盛を極めたことは前述の通りであり、故に多くの人達によって、種々注釈本等が成されている。

こうした状況下に於いて、後には恩田仲任によって「日本蒙求」が著されていることからも、如何に盛んに用いられたか、窺い知ることができよう。

## 平田先生と仙童寅吉との出会い

出会いの経緯については、平田先生が文政五年（一八二二）に書き上げた「仙境異聞」またの名を「寅吉物語」とも言われる著者の最初

に記されている。

所謂、文政三年（一八二〇）十月朔日の夕刻、江戸の国学者屋代弘賢氏（号を輪池）（一七五八～一八四一）が訪ねて来て、

「子（篤胤）のかねて考え記せる説等と、よく符合する事の多い童子が、同学の山崎美成の所に寄寓している、予と共に行かん」と誘われ、かねてより寅吉についての噂を聞き及んでいた先生は、

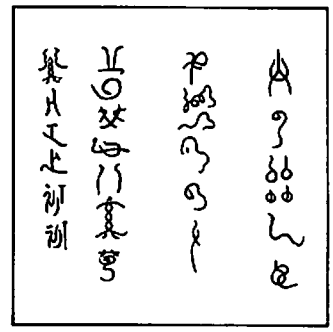
「糺さばやと思う事ども種々き、持ちたれば、甚だ嬉しくて」と喜んで同伴している。この時が先生と寅吉との最初の出会いであり、「仙境異聞」の発端となっている。

時に平田先生四十五歳。寅吉十五歳。

寅吉は江戸下谷七軒町の煙草屋越中屋與惣次郎の次男として文化三丙寅年（一八〇六）十二月晦日の朝七ツ、寅の刻（午前四時頃）に生まれ、その年も日も時刻も寅なるによって寅吉と名づけしと言う。

五六歳の頃から度々、火事・盗難などの透視予言を行うようになったが、七歳のとき、東叡山（現・上野公園）の麓の黒門前五條天神境内で、不思議な薬売りの老人と出会い、以来、常陸国の仙境南台山（岩間山とも言う）に出入りして修行していたことから幽冥界に通じていた。

仙童寅吉像
「平田篤胤全集・第八巻」から



此は寅吉の書なれど何か知れず

この謎の薬売りの老人こそが、神通自在の天狗界の大ボス・杉山僧正のまたの姿とされ、寅吉は終生僧正を師と崇めていた。

寅吉は父の死後、下谷長屋町の薬種商長崎屋主人山崎新兵衛美成（国学者）がもとに寄寓し「天狗小僧」と称されて、江戸市中に知られるようになっていた。

屋代氏に誘われて山崎宅を訪ねた平田先生達は、寅吉とは最初の出会いである。

寅吉は、平田先生をつくづく見て打ち微笑みて

「あなたは神様なり」

と再三云うので、先生は

「いかにして知れるぞ、神の道を学ぶは善き事か、悪しき事か」

と問い返したところ

「何となく神を信じ給ふ御方ならんと心に浮かびたりし故（中略）神の道ほど尊き道は無ければ、これを信じ給ふは、甚だ宜しき事なり」

と答う。

ここで、屋代氏我れをば如何にと問えば、寅吉しばし考えて、

「あなたも神を信じ給ふが、なほ種々ひろき学問を為し給ふらん」

と答えたという。

平田先生は、この時の寅吉と交わした問答で、

「これなん己が此の童子に驚かされたる始めなりけむ」

と言わしめている。

先生は、以前から霊魂の行方を模索し、隠された神秘幽冥界の探求を続け、既に八年前の文化九年（一八一二）に「霊能真柱」を脱稿していたことから、寅吉の仙界・幽冥界の話しには、異常なまでに共鳴を感じた模様である。

以後先生は、寅吉を自宅に引き取り、話を聞きたいと再三山崎美成に対して懇願、漸く承諾が得られて十一日夕刻、美成が寅吉を伴いてみえ、念願かなって寅吉を平田家に寄寓させることになった。

以来、日夜寅吉が語る異界の話の一部始終を記録しているが、屋代氏をはじめ伴信友・佐藤信淵・国友能當なども多く集まり熱心に寅吉の話を聞いている。

然し、寅吉にとっては十一月朔日から始まる寒行の為に帰山することになっていた。この時、先生は寅吉の師杉山僧正に対して、次の如く丁重なる文をしたためて、「霊能真柱」と「神代文字草稿」などを添えて指導を懇願し、これを寅吉に託し、寅吉に対しては詠歌を与え、門人を付き添わせて送り出している。

## 平田先生の杉山僧正への懇願状

今般不慮に貴山の侍童に面會いたし、御許の御動静、畧承り、年来の疑惑を晴し候事ども有之、実に千載の奇遇と辱く奉存候。其に就き失礼を顧みず、侍童の帰山に付して、一簡呈上いたし候。先以其御衆中、ますます御壮盛にて御勤行のよし萬々恐祝に奉り候。

抑々神世より顕幽隔別の定り有之事故、幽境の事は現世より窺ひ知り難き儀に候へども、現世の儀は御許にて委曲御承知有之趣に候へば、定めて御存被下候儀と奉存候。拙子儀は、天社地祇の古道を学び明らめ、普く世に説弘め度念願にて、不肖ながら先師本居翁の志をつぎ、多年その学問に酷苦出情したし罷在候。

併ながら現世凡夫の身としては幽界の窺い辨へがたく、疑惑にわたり候事ども数多これあり難渋仕候間、此以後は御境へ相願ひ御教誨を受て疑惑を晴し度奉存候。此儀何分にも御許容被成下、時々疑問の祈願仕候節は、御教示被下候儀相成まじくや。相成べくは、侍童下山の砌に、右御答被成下候様偏に願上奉り候。

此儀もし御許容被下候はゞ、賽礼として生涯毎月に拙子相応の祭事勤行可仕候。

偖また先達て著述いたし候、霊の真柱と申す書入御覧候。是は神代の古伝によりて、不及ながら天地間の真理、幽界の事をも考記仕候ものに御座候。凡夫の怯き覚悟を以て考候事故、貴境の電覧を経候はゞ、相違の考説も多く可有之と恐々多々に奉存候。

もし御一覧被成下相違の事ども御教示も被下候はゞ、現世の大幸勤学の余慶と生涯の本懐不過之奉存候間、尊師へ宜しく御執成下され、御許容有之候様偏に奉願候。

一向に古道を信じ学び候凡夫の誠心より、貴界の御規定如何と云事をも辨えず、書簡を呈し候不敬の罪犯は、幾重にも御宥恕の程仰ぎ願ふ所に候。　恐惶謹言。

（文政三庚申年・一八二〇）

十月十七日　平田大角

平篤胤花押

常陸国岩間山幽界

嬢岳山人御侍者衆中

猶々寅吉こと、私宅へ度々入来にて、深く懇志を通じ候に付、今般下総国笹川村門人五十嵐対馬と申者に、御山の麓まで相送らせ申候こと実に千載の奇遇と雀踊限りなく奉存候。依之憚を顧ず申上候。

尚此上とも修行の功相積り行道成就いたし候様、拙子に於ても祈望仕候事に御座候以上。

偖また寅吉にはなむけと詠たる歌と、其端言は左に挙がることし。

車屋寅吉が山人の道を修行に山に入るに詠ておくる。

「寅吉が山にし入らば幽世の知らえぬ道を誰にか問はむ

「いく度も千里の山よありかよひ言をしへてよ寅吉の子や

「神習ふわが萬齢を祈りたべと山人たちに言伝をせよ

「萬齢を祈り給はむ礼代は我が身のほどに月ごとにせむ

「神の道に惜くこそあれ然もなくば、さしも命のをしけくもなしかく記し聞かせてぞ与へたりける。

※平田篤胤全集（宝様岩雄編・自明治四四至大正七）三巻から抜粋。

## 平田先生への杉山僧正の回答

十一月二日の夜、思いかけずも寅吉が、笈筥を背に負いて帰ってきた。さて、いかにして今来つると驚喜しながら問へば、

「師は、ことし讃岐国の山周りに当たる故に、寒行は休みなれば子て申せる如く、また里に出よとの事なるに依って、只今来たり」

との由。して願いの儀は如何にと問へば、

「師は書物の事も、手紙の事も疾く知られたる状にて、唯よしよしと点頭せられ、我が賜る神世文字の書をば残らず見て、よく集めたるが、中に三字云々の異体を挙げ洩したれば其由を伝ふべしと云れたり。又、志ありて問はるれば、具に、あやまたず数へよと遣されたり」との、僧正の懇切な回答が寄せられた旨を記録している。

杉山僧正像「本朝神仙記伝」から

## 結び

国学者屋代弘賢は、祖父母以来能筆の聞こえも高く、後には幕府右筆所詰支配勘定役となり、永く幕府目見以上の身分。蔵書の富を以て世に知られ、書庫三棟を上野不忍池畔に建て、これを不忍文庫と称した。

書道は、王羲之や空海の古体をも窮め、国学の塙保己一を補翼する傍ら故実を学んでいる。

また、朱子学の柴野栗山の影響を得て、各藩の文遊に風俗問状を発し、いま我々が座右の参考書としている「秋田風俗問状答」等を

残した人物としても著名である。

当時、平田先生を交遊の一人として、ことのほか好意を以て接していた屋代氏が、平田先生を誘い山崎美成が宅に赴いて一緒に寅吉と面談している。

間もなく、平田先生は寅吉を自宅に引き取り、寅吉が仙界で経験してきたことの一部始終を聞き出して記録したものが、前述の如く所謂「仙境異聞」である。

実はそれ以前に、先生が著した著名な「霊能真柱」は、本居宣長大人の中心的門人、服部中庸の著書「三大考」を基礎として著したものとされている。

その三大考は、天地の始めは、所謂、天と地と黄泉の三つから成立っているとする、古神道霊学の宇宙論を、記紀の中の神話を図像化し、体系的に構成したもので、神道学上まさに先駆的な存在とされている。

然し、同門の中には三大考は、師宣長の古道説を逸脱するとして反発する者も多く、特に宣長の養子大平氏は「三大考辨」を以て、これに批判を行った。

ところが、この大平氏の説に対して、すかさず平田先生は「三大考辨々」を著して、服部氏の「三大考」を擁立したことは、あまりにも有名な出来事であった。

平田先生は、三大考の曖昧な部分に批判を加えながらも、中国の古典や景教（中国に伝来したキリスト教の一派）そして我が国の古典をも徹底的に探求し、独自の神秘世界観に基づき、平田学の真髄を成す代表的な著書「霊能真柱」や「古史傳」等を大成している。

先生は、この霊能真柱の冒頭に神の道を学ぶ為には大和心を固めねばならず、そのためには死後の霊魂の行方を明らかにし、「安心」を得ることが根本であるとの来世観を説いている。

そうした考証は、独創的幽冥界・来世観といった世界観から、更に進めて宗教的普遍性を、模索していたことに外ならない。故に、屋代氏の誘いに対して喜び勇んで、仙界に詳しい寅吉に逢いに出かけたことであろう。

かように、古神道的世界観を、進展確立しようとする先生の強い情念が窺われるが、岩間山の杉山僧正に宛てた前記の懇願状がそれを、何よりも如実に物語っているように思えてならない。

因みに、平田先生は杉山僧正の教導によって、翌文政四年（一八二一）「神字日文伝」稿を成している。

なお、服部中庸の三大考に於ける産霊神の宇宙生成論は、はからずも佐藤信淵先生の「鎔造化育論」へと発展していることを付記しておきたい。

## 後書き

当初は、多可本の中の平田先生の部分を全文掲載して、幕末から明治のはじめにかけての秋田の一般人から、平田先生はどのように見られ、評価されていたかを考察してみたいとの考えであった。

そこには、久保田藩の幕府に対する立場、或いは学問上の確執もあったことは確かであるが、世の常として噂が憶測を呼び、一部を除いた一般町人の間からは、あまり注目されていなかった模様である。そうした先生の不遇な晩年のお姿を、今一度再確認してみたいという単純な考えであった。

然し、執筆途中にして、中国から伝来した蒙求の中の壺公謫天の世界から、何時しか仙境異聞の寅吉の仙界へと心引かれているうちに、論拠が幽冥界で浮遊してしまったことは否めない。

加えて如何にせん、浅学の愚老にとっては、今更、いかようにあがいてみたところで、深遠なる平田学の真髄には、到底迫り得ることの出来ない世界であることは重々自覚している。

ただ、ここで云い得ることは、今、彌高の社に神として崇め祀られている平田篤胤先生と佐藤信淵先生の二柱は、時の絶対的権力者徳川幕府を震憾させた学問の先覚者、実践の先駆者であった。

然し、残念ながらふるさとからは、二柱共々に全くあい容れられなかった不遇の生涯であったことは、単なる偶然とは考えられない。

時代を、あまりにも先取りした先覚者の宿命とでも云うべきものであろうか。

ノーベル文学賞に輝いた大江健三郎氏が「あいまいな日本の私」（岩波新書）の中で、私の祖先が四国の愛媛から江戸に出て、仙童寅吉が語る話を聞いて来たことを、子供の頃祖母から聞かされた記憶と、仙境異聞と平田先生を取り巻く江戸の知識人についても、事例として触れている。

幸い、最近の刊行本の中には、二柱共々専門家によって再々取り上げられてきていることは、その本髄とも云うべき思想的背景をも含めて、改めて見極めようとの、

喜ぶべき動向の現れと考えたい。

本稿を草するに当たって、ご指導を戴いた鷲尾厚先生をはじめ、多くの諸先輩に対して末筆ながら深甚の意を表するしだいである。

なお、本稿において不明瞭な点は、執筆を最も苦手とする筆者の力量不足に依るもので、何とぞご寛容願いたいと共に、皆様の叱咤ご指摘を賜れば幸甚に存ずる次第である。

## 研究所記事

### ■研究所動向

*07・06・07　鹿角市先人顕彰館館長柳沢兌衛氏郷土先覚者の調査来所

*07・07・12　研究所報第九号発行

*07・07・30　NHK名古屋ブレーンズ「東海地方と秋田」平田篤胤関係放送

*07・0・06　宇井邦夫氏（伊吹能舎門人宮負貞雄子孫）権田直助の研究調査来所

*07・08・10　第二四回研究調査委員会　彌高神社斎館

*07・10・01　國學院短期大学教授秋元信栄氏国学関係の研究調査来所

*08・03・20　第二五回研究調査委員会・彌高神社斎館

*08・05・01　彌高叢書第七輯発行

*08・06・23　山口大学教授桑原昭徳氏佐藤信淵の幼児教育思想に関する研究調査来所

*08・08・10　第二六回研究調査委員会・彌高神社斎館

*08・08・17　カルフォルニア大学ロサンゼルス校マークマクナリー氏平田篤胤の研究調査来所

*08・10・01　秋田市小林定晟氏篤胤実妹おふみの消息調査来所

*09・04・09　第二七回研究調査委員会・彌高神社斎館

### ■研究活動

*齊藤壽胤稿「神代系図考」「篤胤の禁厭」／渋谷鐵五郎稿「平田大人門弟家の消息(4)」・07・07・12研究所報第九号所収

*齊藤壽胤講話「甘藷と信淵・篤胤生大人」・07・07・12佐藤信淵大人生誕祭・彌高神社斎館直会殿

*北島昭講話「秋田の偉人―平田篤胤」・07・07・18由利町高麗大学・由利町公民館

*齊藤壽胤講義「佐藤信淵一人と思想（上）」・07・07・26グレートアカデミー・羽後町コミュニティセンター

*齊藤壽胤講義「佐藤信淵一人と思想（下）」・07・08・02グレートアカデミー・羽後町コミュニティセンター

*佐々木榮孝講話「久延毘古神について」・07・08・24平田篤胤大人生誕墓前祭・大沢公民館

*川越重昌著「宇和島藩と佐藤信淵」・08・05・01彌高叢書第七輯

*齊藤壽胤講話「香料再考―佐藤信淵大人の香料発見」・08・05・02彌高神社例祭・彌高神社斎館直会殿

*齊藤壽胤講義「神道史に関する特殊研究―平田篤胤佐藤信淵考」・08・07・12東北六県中堅神職研修会

*渋谷鐵五郎講話「佐藤信淵先生と東京名称について」・08・07・12佐藤信淵大人生誕祭・彌高神社斎館直会殿

*齊藤壽胤講義「国学の思想―平田篤胤」・08・07・13コミュニティカレッジ・秋田県生涯学習センター

*齊藤壽胤講義「国学の思想―佐藤信淵」・08・07・27コミュニティカレッジ・秋田県生涯学習センター

*佐々木榮孝講話「仙童寅吉の話」・08・08・24平田篤胤大人生誕墓前祭・大沢公民館

*渋谷鐵五郎・平田篤胤門人川村則方則道並びに村木重利の調査・08・08中

### ■資料貸借

*羽後町歴史民俗資料館「佐藤信淵学問展」（07・05・02～07・23）に資料貸出

*NHK番組制作局教養番組部「堂々日本史」（08・08・01～08・30）に写真資料貸出

*羽後町歴史民俗資料館「佐藤信淵の学問展」（07・05・02～07・23）に資料貸出

## 研究所報著者別目録

・石田　真　平田篤胤の医学(6)
・伊藤きよ子他　九十九里浜の佐藤信淵(5)
・上田太郎　佐藤信淵と中山真際(5)
・川越重昌　信淵大人と老人問題(1)／佐藤信淵の著作は現在何処に蔵されているだろうか(4)
・桐原萍雄　平田篤胤と四方山譚(1)／佐藤信淵大人追贈余談(2)／側面から見た平田篤胤と後室の親元山崎家について(4)
・熊谷義一　平田大人と六郷熊谷家とのふれあい(1)／(8)
・齊藤壽胤　平田篤胤思想の展開における覚書(1)／雷風義塾と平田古道学(2)／平田篤胤と佐藤信淵の学問と事跡(2)／平田篤胤の農学思想(3)／平田篤胤の和文体の思考(4)／「草木撰種録」をめぐって(5)／佐藤信淵の神道観序論(6)／歌われたる平田篤胤(7)／平田篤胤の神性(8)／神代系図考(9)
・酒井要他　九十九里浜の佐藤信淵(6)
・渋谷鐵五郎　彌高神社外伝(2)／佐藤武右衛門家相伝の佐藤信淵大人に関わる資料(3)／佐藤家霊位の追善供養について(5)／平田大人門弟由緒消息(6)／(7)／(8)／(9)
・武田秀章　明治二年六月平田廷胤伺について(8)
・辰　守弘　毎朝神拝詞記の祭神の異同について(9)
・中澤伸弘　地方における平田国学の影響(8)
・平沢四子男　佐藤信淵の実蹟(5)
・正井勝人　平田大人の性命観(8)
・松本修二　平田佐藤両大人頌徳歌について(8)
・吉野千代次　篠木朔秋田平塾で学んだ小池沢亀のこと(9)

（数字）は刊行号数